

SF的読み解き

子どもという風景

## 第十五回

夕べさびしい町はずれ

堀内 守

こんなに照明が多くなった時代においても淋しい場所  
はたくさんある。

夜のあいだ家の中でくつろいでいる人、テレビを見て  
いる人、パーティを楽しんでいる人——つまり四方に壁  
があるところで、なかまといっしょにいる人たちは、外  
の闇のなかで何が起こっているかを考えない。淋しい場  
所で何かが起こっているのに。

淋しい場所は、大都会にもたくさんある。大人にとっても淋しい場所。年端のゆかない子どもにとっては淋しい場所はコワイ思いをする場所である。

昼間、所かまわず飛びまわっているアキラとフミの場合同様であった。国中の何百万人もの子どもが、夜ひとりで外に出て、暗く不気味な、淋しい場所を通らなければならぬときに、そういうコワイ思いをしている……

ずっと昔につくられたという『叱られて』の歌詞は、このコワイ思いを影絵のようにうたいあげている。ああ、これだけはだれにも言ってはならないのだ。あの淋しい場所がなかったら、子どもの世界はずっと楽しいものだったろうし、アキラやフミはまったく別の人生を歩んでいかもしれないのだから。

ずい分昔のことである。といっても、ほんの昨日のような感じもする。アキラやフミは小さな町に住む幼ない子どもだった。アキラは、フミの家から道一つへだてた家に住んでいた。道路が子どもの遊び場だった時代のことである。狭い小路は、子どもたちの合流する場所で、

そこから小さな神社の境内までは簡単に走って行けた。社から十軒ほど家が並び、そのはずれに墓地があり、寺があった。

淋しい場所だった。昼間通っても竹やぶが音をたて、アキラたちの身を縮ませた。灯がともる夕方からは、そのあたり一帯がコワイ場所と化す。店の並ぶ町の中心までおつかいにやらされる時、そこを通らないとひどい回り道になった。

「町までちょっとおつかいに行ってきた」という声をアキラもフミも恐れていた。だが、この「ちょっと」はしばしばコワさを増幅した。

「いやだよ」とは言えない。

往きはまだそれほどでもなかった。夕焼けも味方をしてくれる。昼間の一部が残っている。まだ、子どもたちの声もそこかしこからきこえてくる。大木の下の暗いところを通るときでもそんなにコワくはない。コワイのは帰り道だ。夕焼けもすっかり消え、味方をしてくれるものがない。ぼんやりした光を放っている街灯は、歩くと

びにアキラやフミの影を地面に細長く写し出した。

寺と墓地にさしかかると、足どりが遅くなる。ひたひたと音をたてる履き物の音さえ不気味になる。何ものともわからぬ影、木のうしろには何かが潜んでいるのかもしれない。

昼間なら、樹齢百年の大木とでも形容でき、アキラたちにはほんのちょっぴり町のシンボルの感を与える大木も、夜になると妖怪のように見え、枝は巨人の手のように見えた。

あらゆる回り道をアキラは知っていた。おつかいにやらされるたびに回り道を通った。そちらも結構淋しいところである。だが、家々からきこえてくる声が救いだつた。おぼけ男、人喰い鬼、鬼婆、山賊、海賊、ありとあらゆるおバケの話が、この淋しい場所にさしかかると、一つの塊になって迫ってくる。自分の足音までがおバケの足音に転じてくる。自分の吐く息までが、おバケの呼吸のように思えるのだった。

アキラやフミたちは、こんなとき、目をつむって走り

抜ける。目をつむって走る——本当だった。おつかいに行くときの荷物さえなかったら、耳をふさいだかもしれない。

家にたどりつくと、走り込んだものだった。

夜の淋しさがどんなであるか、子どもたちはよく情報を交換した。その結果、夜のコワさは軽減されるどころかますます異様な形に成長していった。おバケには火を吐くものが加わり、鱗があり、長い尾をもっているものまで加わっていった。それらがあの淋しい場所に住みついていて、近くを通る子どもをとって食おうと待ちかまえている——

「ああ、ゆうべはもう少しでおバケにつかまえられるところだった」と、アキラはフミに話しかける。

「で、どんなヤツだった」

「大きなツメがあった。あとはおぼえちゃいない」

アキラは破けたシャツをそつと見せてやる。フミの驚いた顔がアキラに体験を誇張させる。

「まっ赤な目玉をしていたようだ。そいつが両手を広げ

て追いかけてきた」

昼間はそんな会話をしててもコワくない。二人は揃って、その場所まで行ってみる。もちろん、何もいはいしない。しかし、時には、そのおバケの残したとおぼしきものが見つかるともあつた。

「やっぱり……」

二人はたがいにならずき合う。ことによると、この界限でさらわれた子どもがいるのではないか。二人は、日頃、この辺で遊ぶ仲間の顔と名前を数えあげる。すると、しばらく顔を見せない子がいつも一人や二人は出てくるのだ。

「そういえば、近頃、あいつの顔を見ないぜ」

二人はこうしてひそかな秘密情報を胸にしまう。にぎやかに語り合つて通つていく大人たちはまだ気がついていないようだが、「あいつ」はどうもおバケにさらわれたのではないか。そういえば、人さらいの話もいろいろな本で読んだ。二人はすっかり無口になつてその場から離れる。

「おバケなんていないよ、ねえ」

そんなとき、大人に向かつて確認することばだ。しかし、大人たちも「いないよ」と断言しないとときもあつた。アキラたちが何か不安げな様子でそうたずねたときなど、大人たちは、いったんは「そりゃ、いないさ」と答えたあと、「でも時折、雨のしょぼしょぼ降る晩などには出てくる。こんなこともあつた……」などとからかうのだ。

子どもがコワがるものがどんなか、大人たちにわかるものだろうか。かつて、自分もコワイものに取り巻かれていたはずなのに、もうすっかり卒業したつもりになっている。のみならず、過去の自分が、夜を恐れ、あたかも夜が町全体をすっぽりと包み込むほど大きな生き物のようだと思ひ込んでいたことなどさえ、けろりと忘れている。暗闇のなかで各種各様の魑魅魍魎ちみちりょうが潜伏しているように見え、そこを通るとき心臓がドキドキしたのを。暗闇は、オニやおバケや幽霊が育つていく場所なのである。

昼間駆けっこをやる時、いつも遅い方だったフミでも、滅法早かったアキラでも、夜のコワさによって恐るべき健脚ぶりを発揮した。転んで膝をすりむこうが、血を流そうが、泣き声も立てずに家の中まで走り込んだ。

「少し静かに戸をあけなさい」と、そのたびに言われた。しかし、それは少しも慰めにはならなかった。

少し大きくなると、アキラはその淋しい場所を通るとき、大きな声で歌をうたって通ることをおぼえた。弱気になる自分を自分の声で励ます。いや、やけに声をはりあげていると、自分の足音や風の音などが気にならなくなるのである。もう少し大きくなると、アキラは淋しいところを手ぶらでは通らなかった。かならず棒切れをもつて通った。たった一本の棒切れがどれだけ彼を力づけてくれたことだろう。

棒切れ一本を右手ににぎることによって、彼はいつものまにか如意棒をもった孫悟空に変身し、剣士に変身し、悪者どもを退治する豪傑にもなった。暗闇は棒切れを身に帯びることによって、ずっと圧力を弱めた。

歌が詩に代わり、やがて英語の一節にとって代わった頃、その淋しい場所はコワさをぐっと無くしはじめた。淋しい場所に住みついていていたおバケたちはだんだんと消えていった。

道が広くなり、街灯も立派なものに変わった。フミやアキラは、おつかいに行く必要がなくなった。夜になって帰ってくるときでも、さほどコワくはなかった。スポーツをやり、もう淋しい場所に住む魑魅魍魎のことについてひそかに情報交換をすることもなくなった。

大木だと思っていた木も老いはじめ、台風によって折れてしまった。

アキラは、自分の子分のようにフミを扱っていたのに、このコワさを忘れるようになってからは、もういっしょに遊ばなくなった。

考えてみると、フミは女の子だった。それをアキラは、この淋しい場所がコワさを失ないはじめた頃を感じた。新しい発見でもあるように。

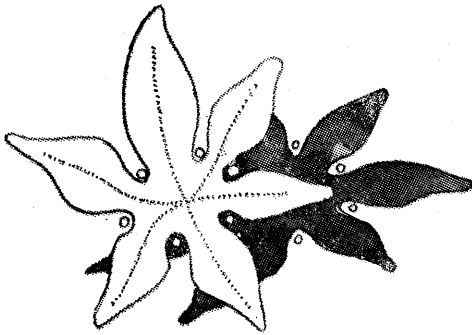
あのコワさの情報交換をしていた頃のフミは、乱暴な

口をきいていた。むきになってつかかってくるときなど、別の意味でコワイくらいだった。それなのに、淋しい場所がコワさを減じるにつれ、フミは別人に見えるはじめ、アキラと口をきかなくなっていた。

「なあんだ」とアキラはひとりてつぶやく。それまで使っていたことばが、これをきっかけにまったく別のイミをもって立ちあらわれてきたからである。

「男の子はこちらに、女の子はそちらに」と幼稚園の時によく言われた。その時の「男の子」にしても、「女の子」にしても、実に簡便な符号のようなものに過ぎなかった。全然抵抗がなかった。境を分かっつ白い糸のようにたあいのないものと思えた。

ところが、いまは「男子」と「女子」というように表現が変わった。それだけでなく、この「ダンス」と「ジョシ」という音の響きはずっしりと重く、単なる符号ではなく、異なった実質がいっぱいに詰まったサブスタンスのように思われてきたのである。アキラにはフミがちよっぴりまぶしく見えてきた。フミはアキラの、の



そのそと黙って歩く歩き方から不愛想な顔つきにいたるまでが、扱いにくいもののように思えてきた。

あの淋しい場所は、以前はずっと広い場所だった。そう見えた。なのに、二人がおつかいの帰り道に目をつぶって走った距離は、計測すればわずか十メートル足らずである。大きな木、竹やぶも消え、ブロックの塀が建てられた。墓地は薄暗い場所ではなくなり、陽光のいっばい降り注ぐ場所になった。道路も拡張され、舗装になった。

墓地の墓石もいっせいに変わった。びかびかに光る墓石がずらりと並んでいるのを見たアキラは自分の目を疑った。

「どうかされましたか」と、運転手の声がした。

「いや、何でもなし。このすぐ先でとめてくれ」

車を帰すとアキラは、寺の門から中へ入ってみた。門柱が変わり、鐘楼が新しくつくられている。住職は草刈機で芝を手入れしていた。アキラはしばらく立ったま

ま、それを眺めていた。

アキラとフミが墓地を遊び場にしていた頃のことである。前夜、おバケが会合をした痕跡のようなものが墓地の入口に残されていたことがある。煙草の吸い殻、マッチの棒、それに何よりの証拠にハンカチが残っていた。

これこそ幽霊がおバケの残したものだと言った二人は、当時まだ青年だった、いまの住職にそれを知らせたのだった。黙って二人のあとをついてきた彼は、ハンカチだけを拾いあげ、ていねいに折りたたんで、自分の胸にしまった。そして「だれにも言うなよ」と低い声で言った。

「おバケの落し物じゃないの？」

そうたずねる二人に、彼は「うむ」とうなずいてみせた。「だから口にすると、タタリがあるかもしれない」

口外しない約束をさせられた二人は、何だか割り切れぬ思いがした。ヤブ蚊がかなりきつく二人をさした。

「幽霊にはヤブ蚊が取りつかないのか」とフミが話をそ

らしてしまった。それをシオに、二人は外に飛び出した  
——ようなのである。

墓地でオンナの人がジサツしていた。という知らせが  
町中を駆けめぐったのはその少しあとのことである。ア  
キラもフミも、現場は見なかった。物々しい感じの警察  
の車が何台もやってきたので、遠くから見ただけで  
あった。ひそひそとささやく大人の口ぶりからあるてい  
ど推察できる。身元はなかなかわからなかった。アキラ  
とフミは、あのハンカチのことを思い出し、そのオンナ  
の人が幽霊に殺されたのだと信じた。そして、以後墓地  
では遊ばなくなったのだ。

そのまわりを子どもたちが走りまわった蓮池。鬼ごっ  
こをして隠れた薬師如来堂や小さな蠟燭ろうそくが何十本も灯さ  
れていた小さな観音堂。

こんなに小さなものだったのか。蓮池などはわずか五  
メートルぐらいの直径に見える。それなのに、こちらか  
ら見ると、向う岸は遠く遠く感じられた。

観音さまの中には何本も手もっている像があった。

それは、子どもたちにはやはりコワイものに見えた。

本堂の床下。向うの方がまる見えになるくらい高かつ  
た。その床下にはアリジゴクが巣をつくっていた。

これらが寺の内部におさまっている。

昼間はさほどコワイところではなかったのに、寺の裏  
手は昼でも湿っていた。じめじめした土。子どもたちは  
滑ってころぶ。すると、「墓の中に引き込まれるぞ」と  
だれかがはやしたてる。はやしたご当人がそうでも叫ば  
ないと気味が悪かったのだろう。

町の中ではこのあたりが淋しくてコワイところであつ  
た。

もう一つ、別な意味でコワイところがあった。裏通り  
の赤ちょうちんのある通りである。なぜコワイのか。そ  
こは子どもにとってはふしぎな場所だった。酔っ払いが  
大声をあげていた。ケンカも時があった。大の大人がわ  
めき、なぐり合う場面によく出あう。女の人の嬌声があ  
たりにひびく。昼、死んだようにひっそりとしているそ  
の一角は、夕方になると活気をもってくる。



赤ら顔の大人たちが大声でしゃべっている。その通りは、アキラやフミがおつかいに行つて帰ってくる途中にあった。何かを焼く煙が道路にも流れてくる。その間を息をつめて走り抜ける。

太い腕が何本も出て、路上の若者をなぐっていたような気がする。アキラは、路上に倒れている若者を何人かの人が足げにするのを見て、はっと立ちどまったことがある。たぶん小学生のころだったろう。倒れた若者は鼻血を出し、白シャツが破れていた。荒っぽい人びとが繩のれんの向うに姿を消した。アキラは倒れている若者の履物があたりに放り出されるのを見た。それを拾つて、渡してやったのだった。

どこのだれだかわからない。けれども、あの当時の道路は、舗装がしてなかった。雨あがりの泥んこの中にあの若者は倒れていた。

なぜか、人びとはだれも助け起こさなかった。

本当にコワイところだとアキラは、そのいきさつをやや誇張してフミに語つてやったものだった。

「ま、おひとつ、どうぞ」

住職は茶を出してくれた。床の間には大小さまざまな形をした松の木の根が置き物につくりかえられて並べてある。アキラがそちらに視線を移すと、住職は笑つて説明した。

「こんなものは、昔は風呂場でたきものになったのですが、いまのようにガス風呂になると、どうにも始末がつかまません。そこで洗つて乾かして、並べてみたのですがね。ごらんなさい。これなぞ仁王様の腕のように見えましょ。あちらの方は、鳥のように見えるし、見ていても飽きません」

アキラは正直に、寺の池がもっと大きかったような気がすると思つた。

「みなさん、そうおっしゃいますよ。とくに町から去つた人たちはね。この町に住んでいる人たちにとつてはいつとも同じに見えるでしょう。小さいとき、自分の魂のなかに住みついた見方は、そのまま生き残り、時をへだて

て戻ってみると、実際の大きさと合わないのです。コワさだって同じです」

「は？」

「ほら、こんなことがあったでしょ。ずっと昔、裏の方でオンナの人がジサツした。

あれ以来、あなたは寺に近寄らなくなったのでしたね。やっぱりコワかったのですか」

妙なことをおぼえているものだ、とアキラは思った。

そこでこたえた。

「いや、あの頃から青年期に入ったので、いろいろな人にあいさつをしなければならぬのが無性にコワかったのかもしれないです。人見知りする方でしたから」

「なるほどね。暗いところがコワくなくなるのと引き替えに、人の視線がコワくなる時期ですわね」

アキラは特に用があったわけではなかった。少年の頃のイメージ・マップ（認識地図）がだんだんおぼろげになっていくので、ついでの時にあの町を訪れてみようと思っただのである。

「街はずれ」と呼び慣らされていたところはもう消えていた。ずっと家並みがつながっていて、おつかいに出されるたびに心臓がドキドキしたあたりにはスーパーマーケットができていた。

その通りを駅までゆっくりとアキラは歩いてみた。途中で裏通りにまわって、あのコワかった通りを確かめ直した。店のつくりは別世界のように変わっていた。

喫茶店があった。看板には「おふみ」とある。アキラにはその店があふみがやっている店のように思えた。

しかし、コワイので入らなかった。

コワさは消えることはない。姿を変えてつきまともものようである。

（名古屋大学）